

# 入梅と出梅日の旧暦と太陽暦の比較\*

吉 持 昭\*\*

## 1 ま え が き

太陰太陽暦では、季節の遅速を表わさないと意見がある<sup>1)</sup>。

そこで、長年の梅雨の入りと、梅雨明けの日付けの記録から、いわゆる旧暦と太陽暦の比較を行なったので報告する。

われわれの、現代の生活を総合して、太陽暦がより便利であることはいうまでもない。しかし、太陰太陽暦が全く季節とは関係がないといい切ることは疑問である。地球大気のエネギー源は、ほとんど太陽から補給されるものであるが、太陽のほかに、物理的機構は全くわからないが、統計的に調べると、特異日や、季節の変化にも、月の影響があるらしいことがわかってきた<sup>2)</sup>。

ブラドレイ等<sup>3)</sup>や、アダレイとボーエン<sup>4)</sup>が月の周期と降水の関係を述べている。ここでは、交点月と朔望月の季節との関係についてもふれている。ご批判が得られれば幸である。

## 2 資 料

1951年、中央气象台がまとめた、予報当番者用気候表のなかの(12ページ)、梅雨の入りと、梅雨明け一覧表を使う。これには、1887年より1949年までのものがあるが、手もとにある神宮暦の関係で、1889年からの資料を使う。したがって、資料数は入梅出梅ともにN=61である。

この気候表では「5月下旬より7月中旬にかけて、高気圧がオホーツク海より三陸沖に張り出し」たものを、梅雨の定義にしてある。

## 3 旧暦と太陽暦の比較法

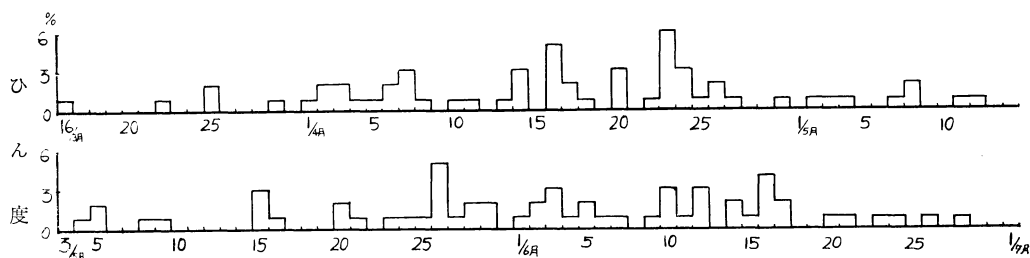
太陽暦の梅雨の入りと、梅雨明けの日付けを、旧暦に変えて、日付け別の出現ひん度を求めたのが第1図である。この場合、旧暦では年によっては29日と30日のものがあるが、計算の便利上すべて30日あるものとして考えてある。

この61年間、旧暦で入梅の最も早いものは1920年の3月12日、遅いのは1927年5月23日であり、出梅は、早いのは1903年の、うるう5月4日であり、遅いのは1938年7月20日である。第1図には平年値を中心にして描いてあり、遅速の両端に近いのは割愛してある。

旧暦と太陽暦ともに、平年の日付けを求め、標準偏差を計算し、結果を第1表に示す。

第1表 入梅、出梅の平年値と標準偏差

	入 梅		出 梅	
	平年値	標準偏差	平年値	標準偏差
旧 暦	4月17日	12.6	6月4日	15.7
太陽暦	5月24日	11.8	7月12日	13.2



第1図 旧暦の日付け別入梅、出梅日出現ひん度上が入梅、下は出梅。

\* Comparison between Lunar-Solar Calendar and Solar Calendar on the Start and Ending of the "Baiu" Season.

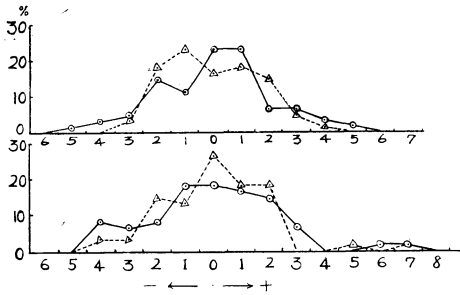
\*\* Akira Yoshimochi. 広島気象地方台  
—1963年3月10日受理—

梅雨期間の平年に2日間の違いの出るのは、実際にはひと月29日しかないのに30日として計算したり、うるう月の考慮がしてないからであろう。

ところで、旧暦と太陽暦の日付けについて分散を計算

し、それが統計的に有意な差が認められるならば、分散の小さいほうが、より入梅、出梅の季節変化を表わしているといえよう。

しかし、第1図にみるように、個々の日付けでは正規分布でなく、第1表の標準偏差だけから検定する方法は筆者にはわからない。そこで、旧暦、太陽暦とも平年値が中心になるような、7日づつの期間に区切ってまとめてみる。すなわち、旧暦の入梅であれば、4月14~20日を0、21~27日を+1、7~13日を-1というようにして出現ひん度を求め、分布図を描いたものが第2図である。



第2図 入梅、出梅日の平年日を中心に7日づつに区切った期間の出現ひん度。上が入梅、下が出梅、実線は旧暦点線は太陽暦。

この第2図の分布が正規型であると仮定し、分散の差の検定を行なう。分散は第2表のようになる。

第2表 第2図から計算した分散

	入 梅 ( $\sigma_1^2$ )	出 梅 ( $\sigma_2^2$ )
旧 暦	5.13	6.45
大 陽 暦	2.92	4.45

$F_0 = u_1^2 / u_2^2$  は入梅が 1.76、出梅が 1.45 となり、F-分布表から  $F_{60}^{60} (0.05) = 1.53$  を読み取る。すなわち、旧暦と太陽暦の分散が等しいという仮説は、5%以下の危険率で入梅のほうは認められ、出梅では認められない。

#### 4 交点月と季節変化の考察

小林善博<sup>5)</sup>は、福島県の1951年から1959年の資料を使って、冬至のころ朔と月の赤緯の北偏がかさなり、夏至のころは南偏がかさなり、春分、秋分のころには朔と月の赤緯の赤道通過がかさなることから、月の気象現象に及ぼす影響を考え、日別の気温偏差を解析し、北偏、南偏

と朔のかさなる時期に低温が現われ、降水量にも関係があるとした。

小林のいうように、北偏と朔のかさなる時期は、夏至を含む暦月、つまり旧暦5月の朔に相当し、これが、梅雨期になるのではあるまいか。

交点月と朔望月は、ともにサロス周期として日、月食に関係し合っている。高橋浩一郎<sup>6)</sup>はこのサロス周期と凶作の問題を取り扱っているが、サロス周期のような長年の変動を研究する場合、いろいろな気象要素を旧暦で取り扱ったよりはっきりするかもしれない。

#### 5 む す び

旧暦と太陽暦の入梅と出梅日について比較を行なったところ、それぞれの日付けを7日づつに区切った出現ひん度の分布が正規分布になると仮定するならば、両者の暦では季節の遅れ進みを表わす場合、梅雨入りのほうはあまり変りないが、梅雨明けでは5%以下の危険率で有意な差がある。

交点月と梅雨現象は今後の問題として提出したい。

梅雨以外の季節の変わり目、たとえば第1回の寒波の吹き出し日や、《春一番》などの日付けについても調べたならば、旧暦と太陽暦の間でどちらが季節をよく表わすかがさらにはっきりしてくるであろう。

現在の三カ月予報や季節予報では、月ごとの平均気温降水量および日照時間を予想することに主眼があるように思えるが、季節の変わり目をより正確に予言する努力も必要であろう。この方面の研究に役立てば幸である。

ご一読下さった広島地方気象台予報課長添田春雄氏に厚くお礼申し上げる。

#### 参 考 文 献

- 1) 関口鯉吉 (1947): 暦の編成に関する諸問題. 全国暦. 七星閣発行
- 2) 吉持 昭 (1962): 東京における降水日数からみた太陰暦日上の特異日と季節の分類について. 天気. 9. 420~423.
- 3) Bradley, D.A., M.A. Woodury, and G.W. Brier (1962): Lunar Synodical Period and Widespread Precipitation. Science. 137. 748~749.
- 4) Adderley, E.E., and E.G. Bowen (1962): Lunar Component in Precipitation Data. Science. 137. 749~750.
- 5) 小林善博 (1960): 月の北偏、南偏時における福島の気温について、東北地方気象研究会東北支部気象学会資料 (プリント)
- 6) 高橋浩一郎 (1954): 日食、月食と凶作との関係について、予報研究ノート, 5. 104~107.